全唐詩「市」考

漢文学教室　塩　見　邦　彦

一

私は先に「唐代の『夜市』」と題して小論を発表し(注1)，その中で「夜市」（夜中(よるじゅう)店を開けている商店）という現象が，中国の南方地方から徐々に中央（長安）へと波及してゆき，年代的には，大暦年間（766～779）にまで遡れることを，唐詩を中心としながら検証したが，この「夜市」の他にも，唐代にはさまざまな「市」が存在した。それらはいづれも唐代詩人たちの詩を集大成した『全唐詩』の中に詠われている。例えば，「城市・朝市・咸陽市・蘭陵市」等といった慣用語彙の他に，「草市・鶴市・酒市・蠶市・魚市・槐市・江市・山市・水市・花市・津市・麺市・亥市・巷市・野市・春市・梅市・柳市・金市・藥市」等といった語彙が詠われる。これら詩中に散見する「～市」の内，その語彙からおよその判断がつくものもあるが(注2)，その措辞からだけでは全く意味不明のものも少からず存在する。

これらの語彙の内，「草市・酒市・鶴市・柳市・魚市・蠶市・金市・春市・槐市・野市・江市・山市・水市・津市・巷市」については，既に先人の論考が存在する(注3)が，その他のものについては触れられていないと言ってよい。この小論では，上記先人の論考をも併せて検討しなおしながら，その語彙の意味をも考えてみたいと思う。

二

一．草市

この「草市」については，早く加藤氏に言及があり(注4)，そこでは以下のように述べられている。

「草市の意義は，當時の文獻に依って明瞭に解釋することは出來ないけれども，恐らくは秣(まぐさ)の市の義であらう。秣は草科と呼ばれ，牧場は草場と呼ばれたが，草市の草も此等の熟字に於ける草と同義であらう」(注5)と判断され，『唐會要』巻七十一，『元和郡縣志』巻二十七，『五代會要』巻十五・二十六，『遊城南記』，『南部新書』巻壬・辛，『建炎以来繫年要録』巻二十一，『黙記』巻中，『老學菴筆記』巻六，『續資治通鑑長篇』巻三二四，王建詩等の諸例を挙げる。更に上記の論をふまえて発展させた論文「唐宋時代の草市及び其の発展」では，『續資治通鑑長篇』巻二五一・二八一，『三朝北盟會編』巻二三六，『金石萃編』巻一五六，『太平寰宇記』巻九〇，『景定建唐志』巻一六，『南齋書』巻五〇等の用例を追加した上で，次の如く結論づけられる。

「『草市』といふ語は少くとも東晉以來存したのである。しかし此の草市といふ語の意味が，唐宋時代の其れと正しく同一であったかどうかは詳かでない。抑も草市の語の最初の意味は何であったらうか。草の意味は二様に解せられる。一つはまぐさの意で，唐宋の頃には草科・草場などいふ語もあるが，六朝期から草にさやうな意味のあったことは，梁の顧野王の玉篇巻一三に『芻蕘草薪也』と云ひ，芻を解するに草字を以ってしたことに依っても知られる。一つは粗末・粗略の意で，史記陳丞相世家・後漢書郭太傳などに其の用例が見えている。的確に定めることはむつかしいが，草市の草は恐らく前者で，草市は本來まぐさの市であったらう。」

引用が長くなった。しかし以上の諸資料及びその原義より，唐代で使用された「草市」は，一方で城外の市場を意味すると思われる延引の義と同時に，本來のまぐさの市をも指していたであろうと思われる。この様な加藤氏の見解に対し，更に「草市」を城市の近郊のみではなく，むしろ遠隔地にも出現していることを指摘したのは日野氏である。氏は『続唐代邸店の研究』の中で南方では「虚（墟）市」と呼ばれるのに対し，北方では「草市」と呼ばれたとする，極めて興味ある見解を示されているが，今その詳細は前掲書に譲るとして，ここではまず唐詩での諸例を見てみよう。

(1)草市多樵家　　草市に樵家多く
　漁家足水禽　　漁家に水禽足る　　（李嘉祐　登楚州城望驛路十餘里山村竹林相次交映）

(2)村邊草市橋　　村辺　草市の橋
　月下罟師網　　月下　罟師の網　　（顧　況　青弋江）

(3)草市迎江貨　　草市に江貨を迎え
　津橋税海商　　津橋に海商を税（お）く　　（王　建　汴路即事）

(4)幾處天邊見新月　　幾処か天辺に新月を見
　經過草市憶西施　　草市を経過して西施を憶う　　（徐　凝　語兒見新月）

(5)夜船歸草市　　夜船は草市に帰り
　春歩上茶山　　春歩　茶山に上る　　（鄭　谷　峽中寓止二首，其二）

杜牧の詩題に現われる「入茶山下題水口草市絶句」の「草市」の他，唐詩に於ては上記の五例である。(4)の例は，あるいはまぐさの市を指しているかも知れないが，他はいづれも城外にあった草市と考えられうるものである。そして，これらの「草市」は，(4)を除いてほとんど河口ないしは河岸に於ける「草市」であって，宋代以降，隆盛を極める交通の要衝としての「草市」の萌芽と認めることができよう。又唐詩人によって「草市」が関心を引き始めるのは，李嘉祐が天宝七年（748）の進士であることから，盛唐頃には既に注目される現象であったらしい。これらの「草市」は(1)の山村や(2)の村辺といった，物々交換的な市を指す場合もあれば，杜牧の詩に詠われる

倚渓侵嶺多高樹　　渓に倚り嶺を侵し高樹多く
誇酒書旗有小樓　　酒を誇り旗に書し小楼有り　　（杜牧　入茶山下題水口草市絶句）

のように小楼まである「草市」，更に「凡江淮草市盡近水際，富室大戸多居其間，自十五年來，江南江北凡名草市，刼殺皆遍」（杜牧　上李太尉論賊書）のように大商人の家まで軒を並べた「草市」も

あって，各詩人によって「草市」の概念は極めて巾のあるものと言えるのであるが，一般的に言って，まず城外にまぐさを中心とする市が発展し，時代が降るに従って他の商品をも売買する市へと発展していったであろう。又交通の要衝であった駅周辺，渡し場周辺にも自然発生的な市が開かれ，段々と大きな市へと発展し，その様な小さな市から大きな市までをひっくるめて「草市」と呼ばれたのだと考えられる。既に指摘があるように(注6)，城外の「草市」の内，大商人たちが多く軒を並べていた「草市」は，盗賊たちの恰好の攻撃目標だったらしく，「草市」を焚かれたり，皆殺しの目にあったという記事が見られる。杜牧の「上李太尉論江賊書」の「刼殺皆遍」はその一つであり，『續資治通鑑長篇』巻一の記事もその一つである。

乙酉，晉州言兵馬鈐轄，鄭州防禦使荊罕儒戰没。罕儒恃勇輕敵，常懸軍深入北漢境，北漢人多閉壁不出，前後擄獲甚衆，於是領千餘騎抵汾州城下，焚其草市而還……　(太祖　建隆元年)

杜牧の文章は唐の大中年間頃とされ，それよりも十五年程遡れば，太和四年 (832) 頃から盗賊に掠奪され始めたということであり，中・晩唐の頃には「草市」の中にも，極めて大きな「草市」が出現していたと言えよう。そして，これら比較的大きな「草市」の出現は，「草市」ただ一つの現象ではなく，「夜市」の様な中央の市坊制を内部から崩壊せしめる現象と連動しながら発展していったらしいことを，上記の年代は我々に教えてくれる。結論を早急に出すことはできるだけ控えたいが，現実の「草市」や「夜市」の出現があり，それらの現象を詩中に詠み込んだ詩句は，あくまでもあとから，それらの現象に触発されて生み出されたと言った方が正確であろう。そのように考えるならば，「草市」が加藤氏の指摘のようにまぐさの市を中心としたものから物の交換及び売買を中心とする市場への質的変化を唐詩の上で確認できるとすれば，600年代の後半か700年代の前半にまで遡れると見ることができようか(李嘉祐詩参照)。恐らく，河口や河岸，宿場駅附近等といった人々の多く集まる所を中心に簇生した「草市」に，まず注目したのは盛唐の詩人であったとだけは言えそうである。

二．柳市

まず，唐詩での「柳市」の用例は以下の如くである。

(1)春來秋去移灰琯　春來り秋去り灰琯を移し
　蘭閨柳市芳塵斷　蘭閨の柳市芳塵斷ゆ　(駱賓王　從軍中行路難二首，其二)

(2)箇裏多情俠少年　箇の裏多情なり俠少年
　競向長楊柳市北　競い向う長楊柳市の北　(王維　同比部楊員外十五夜遊有懷靜者季)

(3)桃源一向絶風塵　桃源は一向(ひたすら)に風塵を絶ち
　柳市南頭訪隱淪　柳市の南頭　隱淪を訪ぬ　(王維　春日與裴迪過新昌里訪呂逸人不遇)

(4)貧居依柳市　貧居は柳市に依り
　間歩在蓮宮　間歩は蓮宮に在り　(皇甫冉　酬楊待御寺中見招)

(5)晩來香街經柳市　晩來　香街　柳市を經(へ)
　行過倡舍宿桃根　行きて倡舍を過ぎ桃根に宿る　(李益　漢宮少年行)

(6)柳市名猶在　　柳市　名は猶お在り
　桃源夢已稀　　桃源　夢は已に稀なり　　（李端　聞吉道士還俗因而有贈）

(7)還歸柳市去　　還帰す　柳市に去り
　遠遠出人羣　　遠遠として人羣を出す　　（權德輿　送映師歸本寺）

(8)槐陌蟬聲柳市風　　槐陌蟬声柳市の風
　驛樓高倚夕陽東　　駅楼高倚夕陽の東　　（韋莊　關河道中）

(9)誰家玉笛吹殘照　　誰が家の玉笛　残照に吹き
　柳市金絲拂舊提　　柳市の金絲　旧提を払う　　（劉兼　蜀都春晩感懐）

唐詩では以上の如く九例であるが，初唐から晩唐まで，各詩人によって詠われていることを確認した上で，では，柳市とはどの様な意味であろうか。これについては既に日野氏の論考があり(注7)，その中で氏は，(3)，(4)，(9)詩について，「詩句の面から直ちにその何であるかを把むことは難しく，劉兼の場合は堤上の柳並木なるかの感さえ与える」とされながらも，(1)，(2)，(6)等の柳市では，「何れも色街を指している用語として受取れなくはない」と結論づけられる。確かに，氏の指摘をまつまでもなく，柳市は又柳巷とも表現される(注8)所から，上記の詩句の内，(1)を除いて，(2)，(6)は日野氏の言われる「色街を指」すとの意で解釈できない訳ではない。いまそれぞれを検討してみよう。

(1)の駱賓王詩は，その題も示すように楽府であり，漢代以降の用法を踏襲して製作されたものと見ることができるが，清代の注釈家陳熙晋は『漢書』萬章伝を引用して，長安の城西に柳市が有ったことを示す。つまり「柳市」は「色街」ではなく，場所としての「柳市」とよばれた地名と見る事も可能であり，この詩の場合，地名と見た方が詩題から言っても妥当なように思われる。同じことは(2)，(3)の王維の詩にも言えることで，近人陳貽焮『王維詩選』（人民文学出版社）の注では，(3)詩の「柳市」を「未詳。當在新昌里北不遠，或因其地係市井，且多柳，故云。非實名」とするものゝ，前句の「桃源」の「桃」と対応して「柳」としたととる事も可能で，(2)詩も「柳市」を地名ととることが可能である。(4)の皇甫冉詩は日野氏も云われる如く「何であるかを把むことは難し」いと考えられる。(5)の李益詩は『全唐詩』二四，雑曲歌辞では「行過倡市宿桃根」となっているのに対し，巻二八四の李益の集では「行過倡舎宿桃根」となっていて，明らかに「倡舎」の方が優れていることは，前句の「柳市」と「倡市」の「市」が重複しないことからも頷けよう。しかし，日野氏が述べられる如く，この「柳市」が色街であるという確証はどこにもない。むしろ，漢代の「柳市」ととって何らさしつかえなく，柳市という所を過ぎて倡家の桃根という妓女の所に宿るという意であろう。桃根は呉均の楽府にもある(注9)ように，長安の妓女の名前であることは確実で，李益詩の題も「漢宮少年行」と漢代になぞらえて詠っている楽府であることも，この「柳市」が漢代長安の地名として用いられている傍証になろう。(6)詩を日野氏は色街と解しておられるが，その詩題から言っても，詩全体(注10)の意味から言っても「色街」と解釈することは難しく，この詩でも下句の「桃源」の「桃」との対応から「柳」としたと見る方が自然ではなかろうか。(7)権德輿の詩もその全体を見れば「色街」の意で用いられていないことは明白であり(注11)，(8)の韋莊詩は前句の「槐柏」と対応している詩語であり，恐らくは地名である。何故なら，これらの「柳市」は六朝詩人江総の楽府「紫騮馬」に早く現われるもので，江総の楽府は漢代楽府を意識していると見られるからである。

揚鞭向柳市　　鞭を揚げて柳市に向い
細蹀上金堤　　細蹀して金堤に上る　　(江総　紫騮馬)

又顔師古によれば「細柳倉有柳市」と指摘するように，漢代には長安県の西南を「柳市」と呼んだらしい。(9)の劉兼詩は蜀の都で詠んだものであるが，日野氏も言われる如く「堤上の柳並木」か，もしくは柳が生えていた所に発生していた市場の意にもとれるが，「色街」でないことだけは確かであろう。

以上の如く，九例の詩句中の「柳市」を検討した結果，そのほとんどは漢代の地名としての「柳市」か，それを意識しながら，広く柳の生えている場所を指すかのいづれかであって、強いて言えば(2)と(4)の詩がいづれとも決めかねると言えようか。九例の内，そのほとんどが日野氏の言われる「色街」の意ではないから，いづれとも決めかねる王維詩等も「色街」の意ではない，などと結論を急ぐつもりはないが，何か別の有力な確証でもない限り，不明は不明のまゝにしておく方が，この場合妥当な様な気がする。

三．鶴市

この「鶴市」についても，既に日野氏に論考があり(注12)，『太平広記』巻四六九，水族部・鐘道の項に「白鶴墟中女子」とあるのを挙げ，「虚は市と同義の南方用語である」(注13)として，許渾詩の「海虚爭翡翠，溪邏鬪芙蓉」句の注「南方呼市爲虚，呼戍爲邏」を引用した上で，「翡翠市を広東方面では翡翠虚といっていたという。然らば白鶴虚は白鶴市の意で，先の鶴市と同義の語となる」と結論づけられる。そして「白鶴市もしくは鶴市とは娼婦をおく肆，即ち娼家の集まっている所，色街を指す語と解すべきであろう。色街を鶴市といったのは，恐らく神仏の説話に因んだものであろう」と推察され，「文人や通人には一般化していた用語ではないかと思われる」とされる。

しかし唐詩では以下の如く二例を検索できるにすぎず，それ程一般化していたとも思えない。むしろ後に述べる「春市」の方が「色街」を指す場合としてはふさわしいと思われるが，この「春市」も二例を検索できるにすぎない。「鶴市」にしろ，「春市」にしろ，用例が僅かしかないこともあり，今後用例の収集につとめることが先決と思われる。

(1)葉舟過鶴市　　葉舟は鶴市を過ぎ
花漏宿龍池　　花漏は竜池に宿る　　(皎　然　送王山人遊廬山)

(2)潮聲漸遇仙人宅　　潮声漸く遇う仙人の宅
鶴市曽迷子夜魂　　鶴市曽って迷う子夜の魂　　(趙　嘏　松江『全唐詩外編』)

四．酒市

日野氏も指摘される如く(注14)，「酒市が酒肆酒楼の集った所」であることは明白であるが，本来は酒を売る店があり，そのまわりに食べ物屋等が集ってできた街並みを言ったものであろう。唐詩に於ては「酒市」は七例の多きを数えるが，いづれも上記の「酒肆酒楼の集った所」の意であり，単なる酒を売る市場という意ではあるまい。

(1)何處相期宿　　何れの処にか相い宿るを期さん
咸陽酒市春　　咸陽　酒市の春　　(姚合　贈劉叉)

(2)高歌酒市非狂者 大嚼屠門亦偶然	酒市に高歌するは狂者に非ず 屠門に大嚼するは亦た偶然	(羅隱　黄鶴驛寓題)
(3)酒市多逋客 漁家足夜航	酒市　逋客多く 漁家　夜航に足る	(韋莊　和李秀才郊墅早春吟興十韻)
(4)片心惆悵清平世 酒市無人問布衣	片心惆悵として清平の世 酒市に人なく布衣に問う	(沈彬　結客少年場行)
(5)亦與樵翁約 同遊酒市春	亦た樵翁と約し 同じく酒市の春に遊ばん	(李中　漁父)
(6)文君酒市逢初雪 滿貰新沽洗旅顔	文君の酒市　初雪に逢い 滿貰の新沽　旅顔を洗う	(齋己　送人入蜀)
(7)朝聞奏對入朝堂 暮見喧呼來酒市	朝に奏対を聞きて朝堂に入り 暮に喧呼を見て酒市に来る	(韋莊　秦婦吟『全唐詩外篇』)

上記の詩の内，(2)詩では『史記』刺客列伝の荊軻の故事をふまえ，(6)詩では文字通り「卓文君の居酒屋」と解してもおかしくないが，夫々の詩が荊軻や卓文君を意識しながら，単に酒を売る店のみを表現しているのではなく，むしろ店とそのまわりの街並みをも含めているととった方が，詩としてのふくらみが有るように感ぜられる。しかも上記の詩句は全て晩唐詩人たちが詠ったものであり，それ以前に遡ることは，今の所不可能である。つまり，「酒市」が詩人たちによって詠まれるのは晩唐以降のことであり，あたかも「夜市」が中唐以降に詩人に詠まれ始めるのと似かよった現象と言えよう。恐らく晩唐頃には，さまざまな市が，都長安や洛陽のみならず，各地方都市にまで存在したことの反映であろう。もっとも文章に早く現われる「酒市」は，『漢書』巻九十二萬章伝にその例を検索できるが，服虔も注で指摘するように「酒市」は文字通り「酒を売る店」の意で，街並全体を指しての謂ではない。

五．春市

この「春市」についても，既に日野氏に論考があり，以下の如く説明される。

李白詩・陳子昂詩を挙げた上で，「春は女囚の古い罰役の一つで，右の春も明かに此れに由来する用法と解せられる。即ち『入春市』や『爲春市徒』とは，栄華を誇った貴女が一転して女因賤婦に落魄する浮世のさだめの悲哀をうたったものである」と。

「柳市」の項でも述べたように，唐詩では陳子昂及び李白の詩の二例しか検索できない訳であるが，まず夫々の詩について先人の注釈を見てみよう。何文匯『陳子昂感遇詩箋』では「春市徒・婦人犯罪，不任軍役之事」と春に注するが，李白詩の王琦の注では『漢書』の以下の文を挙げる。

「高祖得定陶戚姬，愛幸，生趙王如意。高祖崩，恵帝立，呂后爲皇太后，乃令永巷囚戚夫人，髡鉗衣赫衣，令春。戚夫人春且歌曰，「子爲王，母爲虜，終日春薄暮，常與死爲伍。相離三千里，當誰便

告汝」(『漢書』外戚傳第六十七上)

近人瞿蛻園・朱金城校注本でも『漢書』外戚伝を挙げる。陳子昂・李白詩いづれも身分ある女性が罪を得て落魄する意と解釈できる。とすれば,「春市」は日野説のように「色街」と即断するには抵抗があるものゝ,それに近いかもしくは下層界を意味すると言えるであろう。

(1)昔稱夭桃子	昔は夭桃子と称せられ	
今爲春市徒	今は春市の徒となる	(陳子昂　感遇詩三十八首,其十五)
(2)戚姫髡髪入春市	戚姫は髪を髡られ春市に入り	
萬古共悲辛	万古共に悲辛す	(李　白　中山孺子妾歌)

六. 金市

既に加藤・日野両氏に論考がある(注15)。加藤氏は「市といふ語は商業區域を意味する外,その區域の内にあるところの行を意味する場合もあったのである」として,『集異記』の「但於金市訪張蓬子付之。當得二百千。琚異之」を挙げる。この説をうけて日野氏も「此の金市が金行(金肆の町)であり,張蓬子が此の行に属する一金肆であることは,加藤博士の解釈に従って誤りないであろう」とされる。こゝではまず唐詩での「金市」の用例を見た上で,『集異記』の例を検討してみよう。

(1)出金市而連鑣	金市を出でて鑣に連なり	
入銅街而結駟	銅街に入りて駟を結ぶ	(陳子昂　晦日宴高氏林亭并序)
(2)雙雙挾彈來金市	雙々と弾を挾みて金市に来り	
兩兩鳴鞭上渭橋	両々と鞭を鳴して渭橋に上る	(崔　顥　渭城少年行)
(3)五陵年少金市東	五陵の年少　金市の東	
銀鞍白馬度春風	銀鞍　白馬　春風を度る	(李　白　少年行二首,其二)
(4)金市舊居近	金市は旧き居に近く	
鈿車新造寛	鈿車は新しき造に寛し	(呉　融　春詞)

以上の如く,唐詩では四例であるが,まず(1)の陳子昂の詩序について,近人彭慶生氏は『洛陽記』の下文を挙げる。(『陳子昂詩注』,四川人民出版社1981)

陵雲台西有金市,金市北対洛陽壘。

彭氏によれば,この詩序でいう「金市」は,上記の注から洛陽の「金市」であり,陳子昂の詩序の下句にある「銅街」即ち「銅駝街」と対応して表現されていることに注目している。洛陽の銅駝街は『太平御覽』州郡部四に引用する『洛陽記』によれば,「洛陽有銅駝街,漢鑄銅駝二枚,在宮南四会道相對。俗語曰,金馬門外集衆賢,銅駝陌上集少年」とあるところから判断して,任侠に富んだ少年達の集まる所として,既に晋代から有名であったことが判る。その様に見るならば,陳子昂の詩序の「金市」は「銅街(銅駝街)」と対応して用いられたものと見ることができ,日野氏の解・「金肆(金行の集まる所)」の意ではない。又(2)の崔顥の詩でいう「金市」も,漢代長安に置かれた

市の一つであることは，下句の「上渭橋」という語からも判明しよう。(3)の李白詩は，従来さまざまな解釈がなされてきたが，大きく分けると，(i)洛陽の金市，(ii)長安西市の美称，(iii)金肆の集まった街，等に分類できるが，日野氏はこの李白詩も上記(iii)説，つまり「金肆の集まった所」と解釈する。最近の瞿蛻園・朱金城校注本では，『太平寰宇記』三市『洛陽記』の以下の文を引用する。「大市名金市，在大城西，南市在大城南，馬市在大城東」。この説に従えば，(i)の洛陽の金市を指すこととなるが，この李白の詩では「五陵」「銀鞍」の詩語の面に着目すれば，従来の説の内，(ii)の西市(長安）の美称ととって何ら不自然ではなく，更に言うならば酒家等が集まっている街の意に拡大してとってもおかしくはない。(4)の呉融詩について，日野氏はとり挙げていないが，この「金市」も下句の「鈿車（黄金のかざり車)」との対比で使用されていると見るならば，文字通り金市＝金肆（金行）ととる必要もないし，むしろその意に解すれば，ではどこの金行かということにもなろう。以上見た如く，唐詩の四例はいづれも長安か洛陽の金市（あるいは西市の美称）と解釈され，日野氏の説は牽強附会とのそしりをまぬがれないであろう。

ここで加藤氏の説にたち返って『集異記』の用例はどの様な意味であろうか。加藤氏は「金屋の街と解せられる」と言われるが，この場合，金銀細工等を商う店の意ととっても何らさしつかえない。この様な店が多く集まれば「金行（＝金肆)」と呼ばれるものになるであろうが，何も「金肆の集った所」とする必要はないであろうし，個人商店であればこそ琚が異としたという話も真実味を帯びてくるのであり，金銀細工店ととった方が話の内容にふさわしいものと思われる。

七．藥市

『事物紀原』巻八、藥市の条によれば次の様な記事がみえる。

唐王昌遇梓州人得道，號易玄子。大中十三年九月九日上昇。自是以来，天下貨藥輩，皆於九月初集梓州城，八日夜於州院街易玄龍沖地貨其所齎藥，川俗謂之藥市。遲明而散逮，宋朝天聖中，燕龍圓肅知郡事，又展爲三日，至十一日而罷，是則藥市之起，自唐王昌遇始也。有碑叙其本末甚詳。

上記の記事によると，唐の大中十三年（859）年以降に始まったこと。九月初めから八日の夜まで開かれたらしいことが判るが，恐らく梓州から蜀の地方全体へと拡がっていったものと思われ，藥市と言えば蜀の藥市と当時の人々には意識されたらしい。というのも，以下の如く，宋人の隨筆に蜀の藥市について触れた記述があるからである。

(1)一人曰，我於成都藥市遇一至人，得去暈藥，彼云奇甚，而我未試也。因取同烹，而色益黄，意謂藥少未至，増藥再烹，乃林中則真金也。(宋，何薳『春渚紀聞』巻第十，紀丹藥)

(2)成都無名高僧，誦法華經有功。雖王均，李順兩亂於蜀，亦不敢害。一旦忽一山童至寺，言，先生來晨情師誦經，在藥市奉候，至則已在，引入溪嶺數重，煙嵐中搆一跨溪山閣，乃其居也。(宋，文瑩『湘山野録』巻下)

更に丹念に当れば「藥市」についての記事は増えると思われるが，一方唐詩では「藥市」を検索することは難しい。が，柳宗元の「宋清傳」に「宋清・長安西部藥市人也」と記述する所から，加藤氏は長安西市中にある藥屋街，つまり藥行と等しいとされる。唐代長安の「藥市」の例はこの一例であることから，即断は避けるべきであろうが，蜀の「藥市」は藥を売る定期市を指すのに対し，長安のそれは藥行（藥屋街）を指したらしいとだけは言えそうである。

八．蠶市

『事物起原』巻八によると蠶市について以下の様に記す。

仙傳拾遺曰，蜀蠶叢氏王蜀，教人蠶桑，作金蠶數千，每歲首出之以給民家，每給一，所養之蠶必繁孳，罷卽歸於王，王巡境内，所止之處民成市，蜀人因其遺事，每年春有蠶市也。

また，宋人，黄休復の『茅亭客話』九によれば，蜀の蠶市について蠶家氏（『仙傳拾遺』の蠶叢氏のことであろう）を記念して名とし，蠶農の道具のみならず花木果薬什物を貨る市になったと述べている(注16)ことからすれば，蜀の蠶市が蚕をかう道具のみではなく，広く農業一般の道具から花や木，什物類までも扱う市に発展していたことは想像に難くない。

唐詩では以下の如く四例である。

(1)蠶市歸農醉 漁舟釣客醒	蚕市　帰農に酔い 漁舟　釣客醒む	(薛　能　邊城寓題)
(2)蝸廬經歲客 蠶市異鄕人	蝸廬経歳の客 蚕市　異郷の人	(司空圖　漫題三首，其二)
(3)蠶市初開處處春 九衢明豔起香塵	蚕市初めて開く処々の春 九衢明らかに豔かし香塵起つ	(眉　娘　和卓英英綿城春望)
(4)明朝駕幸遊蠶市 暗使氈車就苑門	明朝駕幸し蚕市に遊び 暗に氈車をして苑門に就かしめん	(花蕊夫人　宮詞一百首，其九十三)

上記の内，(3)の眉娘の詩は，綿城（現在の四三省綿陽市）城内の蠶行（養蚕街）を言っているともとれるが，あとは蚕を養う道具を売る定期市的な蚕市であろう。この「蚕市」については加藤氏に論考がある(注17)ので，こゝではくりかえさない。

九．魚市

うお市，うお棚を言うらしいことは，以下の詩例から判断できるが，一方加藤氏の説の如く「魚行」（魚屋街）も存在したことは『酉陽雜俎』続集巻三，支諸皐下にあることからもうかがえる。まず，唐詩での用例をみてみよう。

(1)城邊魚市人早行 水煙漠漠多棹聲	城辺の魚市　人早く行き 水煙漠々として棹声多し	(張　籍　泗水行)
(2)艇子收魚市 鴉兒噪荻叢	艇子　魚市に収まり 鴉兒　荻叢に噪ぐ	(元　稹　間二首，其一)
(3)遠近持齋來諦聽 酒坊魚市盡無人	遠近持斎来りて諦聴 酒坊魚市尽く人なし	(姚　合　聽僧雲端講經)
(4)沙邊賈客喧魚市 島上潛夫醉筍莊	沙辺の賈客魚市に喧しく 島上の潛夫筍莊に酔う	(方　干　越中言事二首，其二)

(5)魚市酒村相識徧　　魚市酒村相い徧なるを識り
　短船歌月醉方歸　　短船歌月醉いて方に帰る　　（羅　鄴　南行）

上記の詩の内，(3)を除いてはいづれも地方のうお市であるらしく，中央から離れた地方や辺鄙な村里でのにぎわいを魚を売る市場に想像することは容易であろう。これらの「魚市」を日野氏のようにたゞちに「草市」と規定してしまう(注18)には，いさゝか早急な結論といわざるをえないが，魚を中心とした小さな市場が存在したことは確かで，やがてはそれを基礎に大きな市へと発展していったであろう。ただ上記の詩の内(3)の詩は，あるいは「魚行（魚屋街）」と同じ意で使用されているかも知れない。しかし，いづれも中・晩唐詩人の詩に現われていることは注目されるべきであり，山市や江市，水市といった，地方での市の様子を詠った詩が，中・晩唐に集中していて，例外は杜甫の「江市戎戎暗，山雲淰淰寒」（放船）位いであろうか。ということは，この場合の「魚市」も含めて，中・晩唐になると地方の都市や農山村に夫々，種々の市がたち，それらを中・晩唐詩人たちが詩中に詠い込んだということになろう。先に見た「夜市」や「酒市」と同様，中唐以降の新しい現象の一コマと言えるのではなかろうか。

十．槐市

既に日野氏に言及がある(注19)が，この「槐市」は唐詩では多用されるものである。

(1)鉤陳肅蘭扈　　鉤陳　蘭扈肅たり
　璧沼浮槐市　　璧沼　槐市に浮ぶ　　（駱濱王　帝京篇）

(2)霧披槐市藹　　霧披れて槐市藹み
　水静璧池圓　　水静かに璧池円かなり　　（崔日知　冬日述懐奉呈韋祭酒張右丞蘭臺名賢）

(3)蓬山高價傳新韻　　蓬山高価にして新韻を伝え
　槐市芳年挹盛色　　槐市芳年にして盛色を挹(しりぞ)く　　（武元衡　酬談校書長安秋夜對月寄諸故舊）

(4)襲芳踐蘭室　　芳を襲いて蘭室を踐み
　學古遊槐市　　古を学びて槐市に遊ぶ　　（劉禹錫　韓十八侍御……故足成六十二韻）

(5)槐市諸生夜讀書　　槐市の諸生　夜読書し
　北窗分明辨魯魚　　北窗分明にして魯魚を弁ず　　（劉禹錫　秋螢引）

(6)散麪遮槐市　　散麪　槐市を遮り
　堆花壓柳橋　　堆花　柳橋を圧す　　（白居易　西樓喜雪命宴）

(7)戲悲槐市便便笥　　戯れに槐市を悲しむ便々の笥
　狂憶樟亭滿滿杯　　狂にして樟亭を憶う満々の杯（羅　隱　暇日感懐因寄同院呉蛻拾遺）

これらの「槐市」は，元来，槐並木を言い，漢代にはここで学生達が郷里の名産品や書物，笙磬，

楽器等を交換したり，売買したりしたことに始まるらしい。そのことから唐代では槐並木と同時に「書生の多く出入りする市や肆」「書生の多く集まる所」「書生仲間」(注20)などを現わすようになったのかも知れない。確かに，唐の長安では十二街の並木には槐の木が植えられていたらしく，例えば，『中朝事跡』に云うとして「天街兩畔樹槐，俗號槐街」(韓愈「南内朝賀歸呈同官」詩の注）と指摘があるし，他の唐代詩人にも以下のように詠われている。「長安車馬道，高槐結浮陰」(孟郊　感別送從叔校書簡登科東歸)「街北槐花傍馬垂，病身相送出門遲」(張籍　送蕭遠弟)。

前述の詩の内，(1)(2)(3)の「槐市」は，漢代の用例をそのまゝふまえたものということができようが，(4)(5)(6)(7)は広く「書生達の街」の意ととれなくもない。『藝文類聚』巻八十八に「槐市は學也」とあるのを見れば，学問そのものを指した場合も有ったのかも知れない。

十一．亥市

宋人呉處厚の『青箱雑記』巻三によれば，「又蜀有亥市，而間日一集，如痎瘧之一發，則其俗又以冷熱發歇爲市喩」とあり，蜀（現四三省）には二日おきに開かれる市を痎市と呼んだらしい。『説文解字』巻七下には「痎二日一發瘧也」と言い，段注では「今日謂間二日一發爲大瘧，顔之推云，兩日一發之瘧，今北方猶呼痎」とする。この顔之推の説は『顔氏家訓』書證第十七に載る以下の記事である。

左傳日，齊候痎，遂痁，説文云，痎二日一發之瘧，痁有熱瘧巴，案齊候之病，本是間日一發，漸加重手，故爲諸候憂也。今北方猶呼痎瘧，音皆。

以上のことから判ることは，二日おきに起る痎瘧にちなんで開かれる定期市のことで，痎と亥とは相い通ずる所から，唐代では「亥市」として詩に詠われる。

(1)亥市風煙接 隋宮草路深	亥市　風煙接し 隋宮　草路深し	(顧　況　歴陽苦雨)
(2)湘南罷亥市 漢上改詞曹	湘南　亥市を罷め 漢上　詞曹を改む	(權德與　湖南觀察使故相國袁公挽歌其二)
(3)亥市魚鹽聚 神林鼓笛鳴	亥市に魚塩聚まり 神林に鼓笛鳴る	(白居易　江州赴忠州至江陵……五十韻)
(4)野橋經亥市 山路過申州	野橋　亥市を經 山路　申州を過ぐ	(張　祐　途中逢李道實遊蔡州)

唐詩では以上の如く，いづれも「亥市」と呼ばれた定期市の意ととれ，中唐詩人によって歴場（現当塗附近)，湖南地方，巴陵（現岳陽市附近)，申州（現信陽市附近）といった，ほゞ南方地方で盛んであったことが判るのであるが，宋代に二日毎に開かれる定期市であったことから，唐代もそうであったかと言えば，必ずしもそうとは限らない。時代が降り，人々が多く聚るようになれば当然五日や十日に一度の定期市はその間隔を縮めたことが考えられるし，この「亥」も「寅申巳亥」の十二支によっているとする清人の説に依りつゝ，「六日に一回市を開き，ついで寅申といふような二つを加えて三日に一回市を開くことゝした」と解された加藤氏の説もある(注21)ように，時代と場所に

よって「亥」のとらえ方も違う所から一概に唐代でも二日に一回開かれていたと見るのは正確を欠くであろう。しかし中唐詩人たちはこの他にも「亥日」を詠んだ詩を意外と残していて(注22)，詩人たちはこの定期市に興味と関心を示したことがうかがえる。權德輿が乾元二年（759）生れとすれば，活躍し始めるようになるのは780年以降であろうから，「夜市」の所でも触れたように市坊制の崩壊と共に南方から「夜市」が波及して行ったように，さまざまな市が，かなり広範に存在したらしい。特に南方や蜀の地方に於て著しい現象であったことがうかゞえよう。

以上，「草市」から「亥市」まで十一の「市」を見てきたが，唐代に入って新しい意味を附与されて詩中に現われる市もあれば，漢代以降の意味をそのまゝ詩中に詠みこんだものもあるが，総じて言えることは，第一に中・晩唐詩人達によって，始めてさまざまな「市」が詩の題材として登場すること。第二に意味が本来の意味から延伸し，そこから派生した新しいニュアンスを帯びて使用されるようになるのは，中・晩唐以降の場合が多いこと，等を指摘することができるように思われる。つまり，このことは，中・晩唐という時代が，従来のでき合いの詩語を詩中に使うだけでは表現不可能になりつゝあったか，又は既になっていたことを物語るものであり，他方，詩人たちの側から言えば，当時の新しい社会現象をいち早く敏感に感じとり，詩語として定着させる作業が，意識すると否とにかかわらず行われたことを物語るように思われる。中・晩唐という時代は，この時代を生きた詩人たちに，否応なく意識の変革をもせまっていた，と言えそうである。

註

(1) 鳥取大学教市学部研究報告　人文・社会科学第39号第１号（1988）

(2) 「魚市・江市・山市・水市・花市・津市・巷市・梅市」等は品名や場所から命名されたと考えられる。この内いくつかは本論で触れた。

(3) 加藤繁『支那経済史考証』，日野開三郎『唐代邸店の研究」，『続唐代邸店の研究』。

(4) 加藤繁『支那経済史考証』上，一六「唐宋の草市に就いて」及び一七「唐宋時代の草市及び其の發展」。

(5) 同上書一六「唐宋の草市に就いて」。

(6) 日野開三郎『続唐代邸店の研究』，VI市名草市の普及(二)，州県城外近郊草市。

(7) 日野開三郎『唐代邸店の研究』，四州県城邑の邸店，参考，金市・酒市・柳市・娼市・鶴市等について。

(8) 「柳巷向陂斜，回陽噪亂鵶」（耿湋，題楊著別業），「歌樓夜宴停銀燭，柳巷春泥汗錦韉」（王禹偁，寄砥劚山主簿朱九齡）等。

(9) 「君不見長安客舍門，倡家少女名桃根」（呉均，行路難五首，其四）。

(10) 「聞有華陽客，儒裳謁紫微。舊山連藥賣，孤鶴帶雲歸。柳市名猶在，桃源夢已稀。還鄉見鷗鳥，應愧背船飛」（全唐詩巻二百八十五）

(11) 「還歸柳市去，遠遠出人羣。苔甃桐花落，山窗桂樹薫。引泉通絶澗，放鶴入孤雲。幸許宗雷到，清談不易聞」（全唐詩巻三百二十四）

(12) 註(7)に同じ。

(13) 同上。

(14) 同上。

(15) 註(3)に同じ。

(16) 「蜀有蠶市，毎年正月至三月，州城及屬縣，循環一十五處，耆舊相傳，古蠶蒙氏爲蜀主，民無定居，隨蠶蒙所在致市居，此之遺風也。又蠶將興，以爲名也。因是貨蠶農之具，及花木果草藥什物」（茅亭客話巻九，鬻龍骨）

(17) 註(4)に同じ。

(18) 日野開三郎『続唐代邸店の研究』VI市名草市の普及(二)(4)軍市と草市に附する市の項で次のような指摘がある。「米市・魚市と呼ばれるものが城外に所在する場合は米・魚の売買を中心としている定期市もしくはそれに

大きく支えられている草市を指していた」。

(19) 註(7)に同じ。

(20) 同上。

(21) 加藤繁『支那経済史考証』上，一七「唐宋時代の草市及び其の發展」。

(22) 「寅年籬下多逢虎，亥日沙頭始賣魚」（白居易，得微之到官後書備知通州之事悵然有感因成四章，其二），「亥日饒蝦蟹，寅年足虎貙」（白居易，東南行一百韻），「江村亥日長爲市，落帆度橋來浦裏」（張籍，江南曲）等。

（平成元年 4 月20日受理）